

イギリス・スコットランドのメディア研究における「脱ナショナリズム」

——メディア・グローバル化の時代のナショナルな想像力の再検討——

加藤 昌 弘

はじめに

本稿の目的は、イギリス、とりわけスコットランドにおけるこれまでのメディア研究の整理を通じて、メディア・グローバル化の時代におけるナショナルな想像力の問題を考察する際に有効な視点を再検討することである。近年、インターネットに代表されるデジタルメディアは、ますます私たちの日常生活の中に入り込み、文化や空間に関する認識を再編成していると言われている。そういった越境的なメディア・コミュニケーションの普及は、国境を超える文化的アイデンティティのあり方を可能にしているだけでなく、新たな形態のナショナリズムを国境の内外で駆り立てていることも広く問題とされている。いわばグローバル化の進展によって、全世界的にあらゆる想像力の再編成がなされつつあるのである。そのような現代社会における問題を考える際に、イギリスおよびスコットランドの歴史的状況を対象とした事例研究が一つの参照系になるだろう、というのが私の立場である^①。

ここであらかじめ結論を先取りしておく、本稿が議論していくのは、従来のスコットランドのメディア研究に内在しているナショナリズム的な傾向である。一九七〇年代以降のイギリスにおいて、中央政府から地方政府への権限委譲が問題とされていった歴史的な過程は広く知られているが、その政治的コンテクストの変化はさまざまな側面で「イギリス」

の枠組みの再検討を促してきた。二〇世紀末における「スコットランド近現代史」への関心や、「イギリス人」のあり方を問うナショナリズム論への関心は、その一部である^②。そしてもちろんメディア研究も、そのような政治的状況とアカデミックな言説のあいだの密接な相互作用と無関係ではない。スコットランドにおけるメディア研究は、アプリアリにスコットランドのメディアとナショナルな想像力の関係を前提としながら、国民国家としての「イギリス」を批判するかたちを取りつつ、実際にはスコットランドの制度的・文化的な独自性を強化・確認しようとするナショナリズム的な色彩の強いものであった。

そういった研究上のナショナリスティックな態度は、イギリスとスコットランドの関係を国民国家とマイノリティとして置き換えて考えることが一般的であった二〇世紀末においては、確かに一定の有効性を有していたかもしれない。しかしながら、二十一世紀におけるメディア・グローバル化の進展を前提としたナショナルな想像力を問題化する際には、そのような枠組みと共に研究のあり方自体もおおいに直視される必要がある。本稿ではスコットランドを対象とした研究史の整理に基づいて、現在の新たな研究視角における「脱ナショナリズム」の必要性を順を追って論じていきたい。

スコットランド研究の諸問題

今や私たちが近代における国民やナショナリズムを語る際に、アンダーソンが定義した「想像の共同体」という概念を避けて通ることはできない^④。興味深いことに、そのメディアとナショナルな想像力の関係に関するアイデアを彼が一九八三年に発表したとき、まずイギリスにおける読者を念頭においていたという^⑤。彼の議論はあくまでもラテンアメリカというヨーロッパの外側において、近代を席卷したナショナリズムのひな形が創られたという点にあったが、なによりも一九八〇年代当時のイギリスにおいてナショナリズム全般への関心が高まっていたことが、アンダーソンにとっては重要なことであった。確かに同年には、ホブズボウムとレンジャーによる論集『創られた伝統』や、ゲルナーによる『民族とナショナリズム』が出版されるなど、現代におけるナショナリズム論の鍵となるアイデアが一齐に提出されており、イギリスにおけるナショナリズムへの関心が高まりを見せていたという彼の指摘は間違いないだろう^⑥。

そういつた当時のナショナリズムへの関心の高まりは、もちろんイギリス国内に限定されたものではなかったし、ヨーロッパを中心とした国際的な動向とも一致するものだった。スマスは、一九七〇年代の西ヨーロッパにおいて頻発した自治独立を求める地域運動をひとまとめに「民族の復活」と呼んだが、他ならぬイギリスにおけるスコットランドやウェールズといったイングランド以外の地域における政治的および文化的な異議申し立ての運動も、そういった国際的な運動の典型例の一つとして位置づけられた^⑦。確かにトム・ネアンが提唱した「連合王国の解体」の危機に直面したイギリスにおいては、ナショナリズムが深刻に受け止められる土壌が十分に整っていた^⑧。スコットランドを事例とした研究は、

そのような背景の中で、国民国家「イギリス」に対する批判的な意味を持つものとして大きく取り上げられるようになったのである。

ところが、この数十年に渡ってスコットランドにおけるナショナリズム研究やメディア研究を駆り立ててきた原動力は、確かに「イギリス」の想像力に対する批判であったが、より厳密に言うのであれば、それは「イギリス」から独立した「スコットランド」という想像力を確立しようとするナショナリズムであったことに、本稿では注意を促したい。そこで問題とされてきたのは、イギリスという制度的な枠組みを批判する一方で、いかにスコットランドがネーションとして自立した存在であるのかを説得的に確立することであった。その態度は長らく国民国家内におけるマイノリティからの正当な批判として受け取られてきたし、日本においても長らく国民国家批判の文脈でスコットランドの事例研究は受容されてきた背景がある^⑨。ここではスコットランドとは「エスニック・マイノリティ」であり、国民国家に異議申し立てをおこなう「エスニシティ」であった。その独立志向の運動はナショナリズムではなく敢えて「地域主義」や「地域ナショナリズム」と呼ぶことが一般的であった。しかしながら二十一世紀の今日においては、もはやスコットランドを「エスニック・マイノリティ」と呼ぶことはないし、スコットランド人としてのアイデンティティに「エスニシティ」という概念を当てはめることも適切ではない。スコットランドの代表的な日刊紙である『スコットスマン』紙が二〇〇七年に行った世論調査によると、必ずしもスコットランド人はイギリスからの独立に賛成ではないことには留意せねばならないが^⑩、少なくとも研究上の用語は大きく変化している。今やスコットランドは「ネーション」であり、スコットランドにおける分離独立の運動は「ナショナリズム」と呼ばれるようになったのである。

スコットランド研究における研究史上のネーション概念への移行を端

的に示している好例を、デイヴィッド・マクローンの著書にみてとることができるとが^⑬。一九九二年に出版された『スコットランド論』の副題は「国家なきネイションの社会学」であったが、これは二〇〇一年に改訂された際に「ネイションの社会学」に変更されている。マクローンもまた長らくスコットランドへの権限委譲を学術的な立場から支持してきた研究者であるから、この変更はまったく驚くべきことではない^⑭。

そのようなナシヨナリストとしての立場は、一個人の立場としてはとりたてて問題とされるべきものではないかもしれない。しかしながら、「想像の共同体」としてのメディアとネイションの関係を批判的に問いつけるべきメディア研究において、スコットランドを事例とした研究にある種のナシヨナリストのバイアスがあるとすれば、それは研究史上で問題とされるべきであろう。この点については、スコットランドのメディア研究の第一人者であるシュレシンジャーが、一九九一年の段階で批判をおこなっているが、残念ながら状況はほとんど変わることがなかった^⑮。すなわち、彼が憂慮した「私たちが実際に例証することを求められている、メディアと集団的アイデンティティのあいだのアプリオリなつながり」を前提とした「国民国家、ナシヨナルな文化、そしてナシヨナル・アイデンティティについての根拠の無い決めつけの数々」が、一九九〇年代のスコットランドでは横行することになったのである^⑯。

以上の問題提起をふまえて、本稿ではメディアとナシヨナルな想像力の問題を検討する際に、これまでほとんど問題とされてこなかったスコットランド研究が持っているナシヨナリズム的な傾向の政治性と、それによって生じる研究視角のバイアスを指摘していきたい。しかし私がここでスコットランド研究の問題点を整理するのは、スコットランドがもはや研究する価値のない事例になったと言いたくない。むしろメディア・グローバリゼーションの時代におけるスコットランドのメ

ディアとナシヨナルな想像力のあり方を検討することが、「想像の共同体」をはじめとするナシヨナリズム研究を支えてきたアイディアに対する批判的な研究になりうると考えているからである。

はじまりとしての一九七〇年代

一九七〇年代は、スコットランドのメディアについての議論が本格的に始まった時代であった。当時のスコティッシュ・ナシヨナリズムが「連合王国の崩壊」を現実的な未来として想像しはじめていたのと同様に、メディア研究もまた「国家なきネイション」の内部におけるマスメディアの役割に対する言及を開始したのである。これはいわば、スコットランドを事例としたメディア研究が、その始まりからスコットランドにおける独自のアイデンティティについての問題と絡み合っていたことを示している。

ジャック・ブランドは、スコットランドにおける初期のナシヨナリズム論者のひとりであるが、同時代においてスコットランドのナシヨナリズムの正当性を主張していたトム・ネアンと同様に、彼もまた明らかにスコットランドへの権限委譲を支持していた。ブランドが一九七八年に発表した『スコットランドにおける国民運動』は、一九七〇年代におけるスコティッシュ・ナシヨナリズムの盛り上がりを反映したもので、「なぜスコティッシュ・ナシヨナリズムを主張する地域政党であるスコットランド国民党（SNP）が、イギリスの政治において中心的な役割を果たすようになったのか」を明らかにすることを目的としていた^⑰。この問いかけが端的に示しているように、彼にとつてスコットランドのナシヨナリズムがその声を高めたことは自明であり、必要なはその現象に対する正当な理由付けだったのである。

ブランドは、マスメディアは大衆の考えに影響を及ぼし、政治におけるアジェンダ設定機能を有する主要なメディアであることを主張している。まさにマスメディアがスコットランドにおけるナショナリズムの感情を支える決定的な役割を果たしていると考えていたのである¹⁷⁾。そのうえ、かつては教養を持ったナショナリストによって出版される文学作品がナショナリズムの想像力を支えていたが、一九七〇年代においてはその役割は大衆的な新聞や放送メディアに移ったという。

しかしながら、一九七九年、ネアンやブランドといったナショナリストたちの予測に反して、スコットランドにおける権限委譲の是非を問う住民投票は否決され、スコティッシュ・ナショナリズムは一九八〇年代において長い低迷を経験することになった¹⁸⁾。このナショナリストとしての歴史的な「敗北」は、スコットランドのマスメディアの影響力を前提としたメディア研究の予想を裏切る批判的な結果であったはずだが、スコットランド研究においては必ずしもそのように受け取られなかった。一九八七年にブランドは、一九七九年および一九八三年の総選挙においてなぜSNPが国政の場における影響力を失って敗北したのかを説明する論文を発表しているが、それはスコットランド人のナショナル・アイデンティティがなぜ選挙の結果に正しく反映されなかったのかを分析するものであった¹⁹⁾。そして彼の議論のなかで興味深い点は、マスメディアにおけるスコットランド人の表象のされ方を問題にしていることである。ブランドは、二〇世紀に入るまでの『パンチ』誌における「押しつけがましいジョーク」の七五パーセントがスコットランドに関するものであったという研究を引き合いにしながら、未だに焼き菓子であるショートブレッド缶やスコットランド人の喜劇的な要素が、スコットランド人にとってもステレオタイプとして認識されていることを指摘している。そういった数々の表象は、選挙のような政治的な場におい

て、スコットランド人にナショナル・アイデンティティを表明することを躊躇わせるものであった²⁰⁾。このブランドの主張は、メディアと想像力をめぐる興味深い二つの論点を含んでいる。一つは、アンダーソンの「想像の共同体」のアイディアによく似た、マスメディアの大衆的な感情や想像力に対する大きな制度的な影響力を前提としていること。そしてもう一つは、そうした影響力を持ったメディアの内部における表象のありかたを問題にしており、とりわけポピュラーカルチャーの影響力を政治的アイデンティティにおいてマイナスの効果をもたらすものとして考えていることである。彼にとってナショナリズムに必要なものは、高級文化だったのである。

こうした議論をふまえて集大成的な論点を提示しているのが、ミーチとキルボーンによって書かれた「国家なきネイションにおけるメディアとアイデンティティ——スコットランドの事例」という一九九二年に発表された論文である²¹⁾。この論文をここで集大成的と位置づけるのは、それが当時のスコットランドのナショナリズムとメディアの関係について「わかりやすく」かつ包括的な説明をしたことで、その後続く地域メディア研究によって無数に参照されることになったからである。彼らは八〇年代においてスコットランドのメディアが、他とは区別されうる独自のコンテンツを流通させてきたことが無視されてきたことを批判した上で、スコットランドにおけるマスメディアがイギリス内部において脱中心的で独自の性格を持つており、スコットランド人のナショナルな想像力を支える力を持つていることを強く主張している。その議論は多岐に渡り、スコットランドのテレビ・ラジオ・映画・新聞のそれぞれのメディアが半自立的な性格を有しており、「スコットランドのネイションとしての自己認識」に大きく寄与していると結論づけている²²⁾。

この一連の研究においては、明らかにスコットランドのメディアが独

自のネイションとしての想像力を創りだすことが期待されていたことはもちろんだが、むしろ重要であるのは、スコットランドがイギリスから独立したナショナルな想像力を有していることを前提として、メディア・コミュニケーションの自律性が論じられていたことである。一連の研究はあきらかにスコティッシュ・ナショナリズムを支持していた。その研究の姿勢は、西ヨーロッパの国民国家内部のマイノリティの主張としてスコットランドを位置づけ、そのナショナリズムに政治的正当性を与えようとするものであった。

一九九〇年代以降のスコットランド研究の展開

一九九〇年代には、ヨーロッパ統合にむけた試みが本格化し、さまざまな側面でイギリスのメディア制度の変容に色濃い影響を与えるようになった。スコットランドとともにその地域的な動向が取り上げられたウエールズのメディア政策を取り上げたアンドルーズによれば、九〇年代のイギリスのメディア政策は、直接的にヨーロッパにおける動向の影響をうけるようになり、間接的にイギリス国内における地域のあり方に影響を及ぼすことになった。例えば、ECが一九八九年から実施した「国境なきテレビジョン (Television without Frontier)」政策は、イギリスにおける一九九〇年の放送法に影響を与え、一九九五年のEU内の各国に向けた標準的なテレビ放送のあり方についての方針 (Television Transmission Standards Directive) は、一九九六年の放送法に反映された。このヨーロッパ規模の放送制度の見直しは、放送メディアの影響力を批判的に見直そうとするものであったというよりも、むしろ放送メディアの重要性を共通認識として成り立っていた。すなわち、国境によって分割された放送メディアがそれぞれの国民国家ごとにナショナルな想

像力を生み出してきたことを前提として、越境的な「多様性の中の統一」的な想像力を生み出すために放送メディアを利用しようとしたのである。^③

そのような状況下において、SNPの隆盛に代表されるスコティッシュ・ナショナリズムもまた、ヨーロッパの視点をイギリスからの独立の主張に取り入れることによって権限委譲の実現に向けた推進力を得ることになった。^④ その政治的な動向は、多くの学術的な分野における研究動向と深く結びついたものだったが、さしあたりここでは「メディアと集団的アイデンティティのあいだのアプリオリなつながり」を前提として量産されていったメディア研究を中心として、大きくわけて三つのトレンドに整理することで、スコットランド研究におけるナショナルなバイアスの問題を明らかにしてみたい。なぜならそういった研究の多くがメディアによる「想像の共同体」としてのスコットランドを取り扱っており、ナショナルな想像力をめぐる問題のに対する研究視角の持つ問題の多くを内在しているからである。

一つめは、スコティッシュ・メディアの独立性をストレートに強調するものである。既に本稿で見てきたように、このテーマは一九七〇年代から一般的なものだだったが、その分析のまなざしは徐々にメディアの制度的なものからその内容分析へと比重を移しながら、緻密に同じテーマを変奏していった。^⑤ コーネルは、ミーチらの新聞メディアにおけるスコットランドの独自性の主張について、一概に実証することは難しいとしながらも、自身は「スコットランドにおける分離主義的な運動があきらかにあった一九一八年以降の新聞」の内容分析を通じて、当時のイギリスには「全国紙」と呼ぶうる流通経路をもった日刊紙は存在せず、スコットランドにおいて出版される新聞はその読者をスコットランド人と想定することによって、十分にスコティッシュ・アイデンティティを形成・維持する力があつたことを主張している。

二つめは、イギリスの放送メディアのナショナルな枠組みを批判するものである。^⑤その批判は主にBBCに向けられ、その中央集権的な体制の改革が訴えられた。例えば、スコットランドのメディア研究においてBBC批判が重要だった理由について、マッキネスは以下のように述べている。

スコットランドのような小さな国では、映画産業やテレビ産業は私たちにとってとても重要である。というのも、それらが私たちに世界をもたらしてくれることと同様に、それらは私たちに、スコットランドで、イギリスで、そしてその外側に向けて、私たちが自身のアイデンティティを世界に対して表明する最も強力な現代的手段をもたらしてくれるからだ。^⑦

右の引用が示しているように、かつてブランドが一九八〇年代に放送メディアにおける「スコットランドについての表象が適切ではない」ことを批判したのと同様に、マッキネスもまたナショナルな想像力を生成し維持していく最も強力なデバイスのひとつとしてメディアを認識していることがわかる。また、スミスは一九九二年のスコットランド消費者評議会の調査結果を取り上げ、スコットランド人がイギリス国内で最も高いレベルで放送内容に不満を持っていることを指摘し、ナショナルな枠組みの改革の必要性を主張している。^⑧これもまた、スコットランド人にはスコットランド独自のコンテンツが必要であるという主張によるものであった。

三つめは、政治的な権限委譲の価値を強調するものである。それらは独立したメディア政策の必要性について訴え、その実現には真の権限委譲が不可欠であることを主張している。^⑨この一連の研究は、スコットラン

ドにおける民主主義の実現にはスコットランド独自のメディアが必要であると主張したり、政治の領域における権限委譲とメディアの領域における権限委譲のあいだに区別を設けてきたことが大きな問題であったと主張している。その中でシュレシンジャーもまた国民国家の内部において政治的コミュニケーションが新たな境界線を創りだすことの重要性を説き、イギリスの公共圏が、その内部における権限委譲と、外側におけるヨーロッパ化と絡み合っており、スコットランド議会の到来はスコットランド人にとって重要な瞬間となるであろうことを主張している。^⑩

従来の枠組みに対する批判的研究の検討

近年のスコットランド研究においては、こうした従来の研究を引き受けたものが試みられてはいるものの、そもそもスコットランドを事例としたメディア研究・ナシヨナリズム研究の絶対量が圧倒的に減少している。^⑪これは一九九九年をもってスコットランド議会を獲得し、一九七〇年代以来の「悲願」を達成したことによるナシヨナリスト的な主張の沈静化と考えられなくもない。しかしここでより重要なのは、従来のナシヨナリスト的な視点を批判するかたちで、これまでスコットランド研究がアプリアリに前提としてきた研究の枠組みを根本的に批判する実証的な研究があらわれてきたことである。^⑫その一連の批判的な研究は、これまでスコットランド研究が強調してきたスコティッシュ・ナシヨナリズムの強靱さや独立したネイションとしての地位といった論点に対して、おおいに問題を提起するものである。

例えばロージイらの共同研究は、スコットランドに対する権限委譲が、逆説的にイングリランドとスコットランドのあいだのニュース記事における地域的な差異を減少させていることを指摘している。^⑬一般的には、権

限委譲の進展はスコットランドが独自の「想像の共同体」を維持する際に有利に働くと考えられるが、彼らによれば、すべての新聞の態度はおしなべてイングランドのもしくはスコットランドのというよりも「イギリス的 (British)」でありつづけており、必ずしも権限委譲が実現したからといって地域的な差異が拡大しているわけではない。さらに、クリバーは、公共放送としてのBBCは「国民統合」の名の下で、一貫してイギリスの「白い」価値観の守護者としておおきな役割を果たしてきたことを指摘している³⁴。そもそも国家のような権威によって運営される公共放送に「有機的な共同体」の形成を期待すること自体が時代遅れであり、むしろグローバルな私企業によって運営される衛星放送やケーブルテレビ、さらにはインターネットといったデジタルメディアに期待するべきであると彼は指摘している。クリバーの議論はウェールズにおける状況を部分的に踏まえており、英語ではなくウェールズ語で放送を行っている放送局であるS4Cに関する言及がある。彼が目しているのは地上波放送としてのS4Cというよりも、S4Cが新たに開始したウェールズ語によるデジタル放送チャンネルに対してであり、「テレビジョンの時代は終わっていないが、中央集権のもしくは国家によって主導される時代は終わった」ことは、今日のイギリスにおける多文化社会にとつて望ましいことであると主張している³⁵。

スコットランドのメディア研究において安易に適用されてきたアンダーソン流の「想像の共同体」の理論についての批判を提示しているのが、スコットランドのポピュラーカルチャーの分析からナショナルな想像力を論じようとしているエデンサーである³⁶。彼によれば、アンダーソンやゲルナー、ホブスボウムといった従来ナショナルリズムと想像力の問題を論じる際に広く用いられてきた枠組みは、ポピュラーカルチャー研究の立場からは、文化の捉え方があまりにも靜的に過ぎるといふ³⁷。またその

一方で、動的なポピュラーカルチャーを研究対象としてきたカルチュラ・スタディーズにおいては「奇妙なことに」ネイションに対する言及が欠落していることを指摘している³⁸。この批判はおそらく正鵠を射ており、それがこれまでスコットランドのナショナルな想像力を検討しようとする研究がほとんど取り扱ってこなかった問題であることは間違いない。

また、これまでのナショナルな「想像の共同体」研究が対象としてきたメディアのバリエーションの少なさは、エデンサーを含めた複数の論者によって指摘されている³⁹。イスラエルにおけるニュース報道を分析したフロスらは、「想像の共同体」の枠組みの有用性を評価しつつも、何らかの集団的な想像がなされる際に「異なる種類のメディアによる機能や、様々なコンテクストの違いが、その作用を促進したり、束縛している」ことを強調し、そもそもは出版メディアを対象としたアンダーソンの議論をそのまま放送メディアに敷衍することを批判している⁴⁰。エデンサーもこの点についてほぼ同じ批判を行っている⁴¹。

ここで強調しておかねばならないのは、こうした研究が、単に従来のナショナルな「想像の共同体」を批判する際に、その崩壊や無効性を論じているのではなく、メディアという文脈に応じたその動的な変容を論じようとしていることである。グローバル化・メディアの上で試みられていることにおけるナショナルな想像力を検討したワンは、台湾におけるネイションの形成が、流動的なグローバル・メディアの上で試みられていることを主張しているが、これはナショナルな想像力が今やグローバルなメディアのフローの中で再編成を繰り返すものであることを認めているからである⁴²。周知のように台湾は政治的に定義が困難な状況下に置かれ続けているが、そのような状況ゆえにワンは「台湾は世界のどこよりも想像されたネイション」であるといふ⁴³。台湾の事例とスコットランドの事例

を単純に引き比べることはできないが、メディア・グローバル化を前提としてナショナルなものを論じようとする研究視角は多いに参考にするべきであろう。

こういった研究が強調しているのは、メディアのデジタル化・グローバル化といった背景的な変化をふまえることだけではなく、新たなメディアのもつ流動性や双方向性であることは、歴史的にもきわめて興味深い。というのも、かつて一九六〇年代にメディア研究を席巻した「メディア帝国主義」の議論は、第二次世界大戦以降、欧米から第三世界に対して一方的にテレビ放送とポピュラーカルチャーが流れ込んでいる状況を文化帝国主義批判のなかで捉えたものであった。それらの主張を支えたのは、欧米内部における反省的な視点というよりも、まさに第三世界の側におけるナショナリズムであり、独立したネイション建設には独立したメディアが必要であるという信念であった。^{④③}しかしそのようなメディア帝国主義の議論が持っていた一方向性は、メディアの双方向性の強調やオーデイエンス研究における受容理論の確立などによって徐々に乗り越えられていった。^{④④}二〇世紀末のスコットランド研究をめぐる動向を、そういった過程と重ね合わせて考えることは、必ずしも時代錯誤的なものではないだろう。

メディアと想像力をめぐる新しい研究視角へ

スコットランドにおけるメディア研究は、ここまで見てきたように、その分析視角がナショナリズムによって支えられ、かつ出版および放送メディアに関心を偏らせてきたことから、ある種の行き詰まりに陥っている。その行き詰まりを打ち破るには、新たな研究視角の導入が必要である。そのため本稿では、ナショナリズムなまなざしから距離を

取り、スコットランドがイギリス国内で置かれている状況を冷静に再検討することや、広範なポピュラーカルチャー研究やメディア・グローバル化論が提起しているラディカルな視点を検討する必要性があることを議論してきた。

最後にここでは、スコットランド研究におけるメディア・グローバル化を考察する際の制度的な困難さ指摘することで、逆説的に越境するナショナルな想像力という文化的な状況を分析する重要性を主張してみたい。

スコットランドの政治的な立場は依然として不安定なままである。スコットランドが定義としての「ネイション」になったのかどうかは慎重な検討が必要だとしても、少なくとも現時点におけるその国制は「国家(state)」ではなく「国(country)」と呼ぶべきものである。スコットランド議会の権限はあまりにも限られているし、放送メディアも依然としてロンドンを中心としたBBCやITVといった公共放送に多くをよっている。スコットランド国民党は、スコットランド放送協会(Scottish Broadcasting Corporation)の設立を訴えてもいるが、その主張は裏を返せば、依然としてスコットランドにとつては、BBCによる秩序が、不自由や不平等の象徴であることを示している。^{④⑤}

そしてそのような従来のメディア制度における不自由さは、決してインターネットに単純に視点を移した場合にも解消されないことを、ここでは指摘しておかねばならない。シュレシンジャーが二〇〇四年に発表した論文は、その困難な事実を裏付けている。その論文は、二〇〇三年に発布された新たなイギリスの通信法をふまえてスコットランドにおけるメディア政策についての提言を含んでいる。二〇〇三年の新しい通信法は、従来イギリスにおいては分けて考えられてきたテレコミュニケーションと放送を一つの法令によって統制しようとする初めての試みであ

ったという意味で、画期的なものである。この通信法はインターネットについての規定を含まないが、放送とテレコミュニケーションを融合して考えようとするイギリス政府の方針は、明らかにインターネットをはじめとしたネットワーク型のデジタルメディアを念頭に置いている。メディア企業の交差所有を認めたことも、デジタルメディア化によって生じるメディア企業の統廃合を念頭に置いたものであった。^④

その一方で、興味深いことに、シュレシンジャーの主張からはインターネットについての具体的な政策に関わる議論がすっぱりと抜け落ちていく。彼はテレコミュニケーションについて、その論文の末尾で少し触れているだけであり、それについての問題はイギリスという国家の枠組みの中でも複雑に入り組んだもので、スコットランドから手をだすことはきわめて難しいという。^⑤この点については、同じように二〇〇三年の通信法の改正をふまえて書かれたコリンズの議論が参考になるかもしれない。^⑥彼はシュレシンジャーとはまったく逆と云ってよい立場、すなわち、イギリス国家がいかによくメディアを統治する必要があるのか、という観点からその論を展開しているが、インターネットについての見解はよく似ている。コリンズは、二〇〇三年の通信法がインターネットを直接の規制対象から除外しているからと云って、「決してインターネットが規制の対象から除外されているわけではない」という。彼はインターネットは支配することができないメディアだという考えを「神話」として退け、実際には伝統的な法制度によって国家による管理が可能であることを主張している。^⑦すなわちインターネットは、複数のメディアが管轄する領域が重層的に折り重なったものであり、決して単一のもではない。インターネットを統治するということは、それに関係する個別の領域それぞれを規制するということであり、それは既存の国内法の組み合わせによっても可能である、とコリンズは主張しているのである。

したがって、イギリスという国家が既に完成されている国内の情報基盤を背景として、インターネット上に流通する情報を統制することも可能なのであり、必ずしもインターネットが地域や「マイノリティ」を既存のナショナル・メディアの秩序から自由にするわけではない。^⑧

そのような状況を踏まえて、シュレシンジャーもまた、「スコットランドにおいて、制度的に文化を取り扱う枠組みとメディア・コミュニケーションにおいては、依然として国家の権力が大きいことを認めている。^⑨この点を解消することは難しいので、彼によれば、スコットランドにおけるナショナルリズムやアイデンティティといった文化的な諸問題と制度的なメディア政策の問題は必ずしも直結させて考える必要はなく、むしろ注意深く区別して取り扱う必要がある。そのためには、スコットランドの問題をイギリスという狭い枠内ではなく、ヨーロッパやグローバルゼーションを踏まえたより広い枠組みで論じていくことが重要である。彼はここで、一九九一年におこなったメディアとアイデンティティの議論への批判を、形をかえて再び繰り返していると考えられるのである。スコットランド研究は長らく、ナショナルなメディアがナショナルな想像力を作り出すはずであるという前提から自由になることができなかったために、研究視角において大きな問題を抱えるようになった。エデンサーはポピュラーカルチャー研究の文脈から、シュレシンジャーはメディア研究の文脈からその点を指摘しており、それぞれ立場は異なり口ぶりも違うが、批判しようとする問題は同じものである。スコットランド研究の視点は、メディア・グローバルゼーションがもたらす複数の側面において、見直されねばならないのである。

おわりに

このように、かつては地域主義をナショナルな問題に限定して批判的に検討するうえでスコットランドの事例研究は有効な視角を有していたが、現在ではその有効性はグローバルゼーションという広い文脈での様々な問題の検討へと重心を移しつつある。インターネットの普及に代表されるメディア・グローバルゼーションの拡大は、決してナショナルな問題を過去のものにするのではなく、ナショナルなものに新たな文脈を提供している^⑤。現代のスコットランドはいわば「グローバルの中のローカル」であり、スコットランドを事例とするメディアとナショナルな想像力に関する研究は、「イギリス」に対して立ち向かっていくだけでなく、広くグローバルなメディア研究へ寄与することが求められている。

そのためには、長らくスコットランド研究がとられてきた視点を見直す「脱ナショナルリズム」の視点が必要である。スコットランド研究は決してその批判的な潜在力を失ったわけではなく、国民国家に対抗してきたサブナショナルな地域が、やがては批判対象を模したネイションになっていくなかで直面する新たな問題を体現しているのではないだろうか。

したがって、イギリスとスコットランドをめぐる従来の「国民国家批判」の研究視角は多いに見直されなければならないものの、メディア・グローバルゼーションの過程の内部でのローカル・ナショナルな問題の事例としては、まだまだスコットランド研究には探求すべきことが残されていると言える。

注

① 拙稿「空間的想像力とメディアの歴史的分析——世紀転換期英国にお

ける「ケルト辺境」の編制」、『立命館史学』二六号、二〇〇五年、一〇二六頁。拙稿「ナショナル・メディアにおける文化的想像力の歴史的分析——一九六〇・七〇年代英国の地域主義をめぐる言説の編制」、『歴史家協会年報』一号、二〇〇五年、五一〜六八頁。

② 日本語でのイギリスの権限委譲をめぐる問題の紹介は、小林照夫「スコットランドのデイヴオリューション——その現実と課題」、『関東学院大学文学部紀要』八五号、一九九八年、二二七〜四〇頁。アリス・ブラウン、デイヴィッド・マクローン、リンゼイ・パターソン「スコットランドにおける政治と社会（一）」草薙喜義、隅田忠義訳、『亜細亜法学』三三号二巻、一九九八年、一〇七〜三六頁。その続編となる「同（二）」は、『亜細亜法学』三四号二巻、一九九九年、一五九〜八〇頁。

③ Richard J. Finlay, 'New Britain, New Scotland, New History?: The Impact of Devolution on the Development of Scottish Historiography,' *Journal of Contemporary History* 36.2 (2001): 383-393; John R. Gold, and Margaret M. Gold, *Imagining Scotland: Tradition, Representation and Promotion in Scottish Tourism since 1750*, London: Scholar Press, 1995; David McCrone, Angela Morris, and Richard Kiely, *Scotland the Brand: The Making of Scottish Heritage*, Edinburgh: Edinburgh University Press, 1995; リンダ・コリー『イギリス国民の誕生』川北稔監訳、名古屋大学出版会、二〇〇〇年。

④ Paul Frosh, and Gadi Wolfsfeld, "ImaginNation: News Discourse, Nationhood and Civil Society," *Media Culture and Society* 29.1 (2006): 105-29.

⑤ Benedict Anderson. *Imagined Communities: Reflections on the Origin and Spread of Nationalism*, London: Verso, 1983; 梅森直之『ネディクト・アンダーソン「グローバルゼーションを語る」』光文社新書、二〇〇七年。

⑥ Eric Hobsbawm, and Terence Ranger, eds. *The Invention of Tradition*, Oxford: Oxford University Press, 1983; Ernest Gellner. *Nations and Nationalism*, Oxford: Blackwell, 1983.

⑦ Anthony D. Smith, *Nationalism in the Twentieth Century*,

- Canberra: Australian National University Press, 1979; アントニー・D・スミス『ネイションとエスニシティ——歴史社会的考察』巢山靖司・高城和義ほか訳、名古屋大学出版会、一九九九年。マイケル・ワトソン『マイノリティ・ナショナリズムの現在』浦野起央・荒井功訳、刀水書房、一九九五年。
- ⑧ Tom Nairn, *The Break-Up of Britain: Crisis and Neo-Nationalism*, London: NLB, 1977.
- ⑨ 梶田孝道『統合と分裂のヨーロッパ——EC・国家・民族』、岩波新書一九九三年。一條都子「イギリスの解体——マルチ・ナショナル国家イギリスとEU」、西川長男・宮島喬編『ヨーロッパ統合と文化・民族問題：ポスト国民国家時代の可能性を問う』、人文書院、一九九五年、二三四～二五一頁。
- ⑩ “Young Favour Union: Scotsman/CM Poll Shows Strong Support for Britain among 18-24-Year-Olds But Middle-Aged Express But,” *The Scotsman*, 16 January 2007, 4-9.
- ⑪ David McCrone, *Understanding Scotland: The Sociology of A Stateless-Nation*, London: Routledge, 1992; David McCrone, *Understanding Scotland: The Sociology of A Nation*, 2nd Edition, London: Routledge, 2001.
- ⑫ 一九七八年から一九九二年にかけてエディンバラ大学をベースに発行されていた『The Scottish Government Yearbook』という雑誌の編集に、マクローンは初期から関わっていた。発刊年からわかるように、当初は一九七九年の住民投票でスコットランドに権限委譲がなされることを前提としたものであったが、その夢が破れた後も雑誌は継続され、具体的なスコットランドからの政策提案に関わる論文を掲載した。この雑誌は一九九二年にいったん解消されたが、『Scottish Affairs』という各前号ごとに継続されている。
- ⑬ Philip Schlesinger, *Media, State and Nation: Political Violence and Collective Identity*, London: Sage Publishing, 1991.
- ⑭ Alex Law, “Near and Far: Banal National Identity and the Press in Scotland,” *Media Culture and Society* 23.3 (2001): 299-318.
- ⑮ Nairn, 1977.
- ⑯ Jack Brand, *National Movement of Scotland*, London: Routledge, 1978, 3.
- ⑰ *ibid.*, 139-40.
- ⑱ 富田理恵「スコットランド自治運動——その背景と過程」、『南山大学ヨーロッパ研究センター報』八号、二〇〇二年、一三二～一五一頁。
- ⑲ Jack Brand, “National Consciousness and Voting in Scotland,” *Ethnic and Racial Studies* 10 (1987): 334-48.
- ⑳ *ibid.*, 336.
- ㉑ Peter Meech, and Richard Kilborn, “Media and Identity in A Stateless Nation: The Case of Scotland,” *Media Culture and Society* 14.2 (1992): 245-60.
- ㉒ *ibid.*, 258.
- ㉓ Leighton Andrews, “The National Assembly for Wales and Broadcasting Policy,” *Media Culture and Society* 28.2 (2006): 191-210; Shalini S. Venturelli, “The Imagined Transnational Public Sphere in the European Community’s Broadcast Philosophy: Implications for Democracy,” *European Journal of Communication* 8.4 (1993): 491-518; 鈴木弘貴「EU統合と汎欧州民間テレビジョン局『ユーロニュース』——ナショナル・コンテクストからヨーロッパアン・コンテクストへの試み」、『マス・コミュニケーション研究』五五号、一九九九年、一六七～一八五頁。
- ㉔ 一條都子「現代スコットランドのナショナリズムにおける「ヨーロッパ」の役割」、『国際政治』一一〇号、一九九五年、八五～九八頁。
- ㉕ Peter Meech, “The Daily Record: A Century of Neglect and Success,” *Scottish Affairs* 13 (1995): 1-14; Doogan, 1999; Law, 2001; Liam Connell, “The Scottishness of the Scottish Press: 1918-39,” *Media Culture and Society* 25.2 (2003): 187-208.
- ㉖ Neil Blain, and David Hutchinson, “The Limits of Union: Broadcasting in Scotland,” in Sylvia Harvey, and Kevin Robins, eds. *The Regions, The Nations and the BBC*. London: British Film

- Institute Publishing, 1993, 49-58; Kevin Robins, and James Cornford, "Not the London Broadcasting Corporation?: The BBC and the New Regionalism," in Harvey, and Robins, eds. 1993, 8-26; John MacInnes, "Rise and be A Broadcaster Again?" *Scottish Affairs* 7 (1994): 135-41.
- ②⑤ MacInnes, 1994, 135.
- ②⑧ Nigel Smith, "Broadcasting and A Scottish Parliament," *Scottish Affairs* 5 (1997): 30.
- ②⑨ Smith, 1997; Des Freedman, "What Use is A Public Inquiry?: Labour and the 1977 Annan Committee on the Future of Broadcasting," *Media Culture and Society* 23.2 (2001): 195-211; Philip Schlesinger, "Scottish Devolution and the Media," in Jean Seaton, ed. *Politics and the Media: Harlots and Prerogatives at the Turn of the Millennium*, Oxford: Blackwell, 1998, 55-74; Damian Tambini, "Devolution and the Media: Answering the Pressure for Change," *New Economy* 6.3 (1999): 151-3.
- ③⑩ Schlesinger, 1998, 55, 72.
- ③⑪ Michael Higgins, "Putting the Nation in the News: The Role of Location Formulation in A Selection of Scottish Newspapers," *Discourse and Society* 15.5 (2004): 633-48; Michael Higgins, "Substantiating A Political Public Sphere in the Scottish Press: A Comparative Analysis," *Journalism* 7.1 (2006): 25-44.
- ③⑫ Michael Rosie, et al, "Nation Speaking unto Nation?: Newspapers and National Identity in the Devolved UK," *Sociological Review* 52.4 (2004): 437-58; Glen Creeber, "Hideously White: British Television, Globalization, and National Identity," *Television and New Media* 5.1 (2004): 27-39; David Ward, "State Aid or Band Aid?: Did the European Commission Really Destroy the European Model of Public Service Broadcasting?," *Media Culture and Society* 25.2 (2003): 233-50.
- ③⑬ Rosie, et al, 2004, 437.
- ③⑭ Creeber, 2006, 30-1.
- ③⑮ *ibid.*, 35.
- ③⑯ Tim Edensor, *National Identity, Popular Culture and Everyday Life*, Oxford: Berg, 2002; Tim Edensor, "Reconsidering National Temporalities: Institutional Times, Everyday Routines, Serial Spaces and Synchronicities," *European Journal of Social Theory* 9.4 (2006): 525-45.
- ③⑰ Edensor, 2002, 2.
- ③⑱ *ibid.*, 1.
- ③⑲ Edensor, 2002; 2006; Frosh and Wolfsfeld, 2006; Horng-luen, Wang, "Rethinking the Global and National: Reflections on National Imagination in Taiwan," *Theory Culture and Society* 17.4 (2000): 93-117.
- ④⑩ Frosh and Wolfsfeld, 2006, 105.
- ④⑪ Edensor, 2002, 7-8.
- ④⑫ Wang 2006, 95.
- ④⑬ *ibid.*, 94.
- ④⑭ Chin-Chuan Lee, *Media Imperialism Reconsidered: The Homogenizing of Television Culture*, London: Sage, 1980.
- ④⑮ James Curran, and Myung-jin Park, "Beyond Globalization Theory," in James Curran, and Myung-jin Park, eds. *De-westernizing Media Studies*, London: Routledge, 2000, 3-18. 邦訳書名『メディアと睡眠の脱西欧化』杉山光信・大畑裕嗣訳、勁草書房、二〇〇三年。
- ④⑯ Scottish National Party, *More Job, Better Funding: The Case for A Scottish Broadcasting Corporation*, June 2007.
- ④⑰ Philip Schlesinger, "The New Communication Agenda in Scotland," *Scottish Affairs* 47 (2004): 16-40.
- ④⑱ *ibid.*, 35.
- ④⑲ Richard Collins, "Internet Governance in the UK," *Media Culture and Society* 28.3 (2006): 337-58.
- ⑤⑩ *ibid.*, 344.
- ⑤⑪ 国家的なインターネットに対する情報統制で話題となるのは中国だが、

その他の国でも児童ポルノなどを中心として国家が管理すべきであるという議論は根強い。こうした事例が明らかにしていることは、コリンズが言っているように、インターネットは決して管理が不可能なメディアではないということである。

⑤② Schlesinger, 2004, 35-6.

⑤③ 「グローカリゼーション」論で知られるローランド・ロバートソンも、

近年は共同研究を中心としてスコットランドにおける事例研究を発表している。Richard Giulianotti, and Roland Robertson, "Glocalization, Globalization and Migration: The Case of Scottish Football Supporters in North America," *International Sociology* 21.2 (2006): 171-198.

(本学大学院博士後期課程)